

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990100844		
法人名	医療法人 湘風会		
事業所名	グループホーム ジョイフル(ユニット1 ユニット2共通)		
所在地	栃木県宇都宮市中岡本 2389-1		
自己評価作成日	令和4年1月21日	評価結果市町村受理日	令和4年4月11日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ご利用者様が持っている残存機能が維持できるように、日常生活やレクリエーション等を声掛け、工夫しながら職員一同行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所の建物1階には、法人が経営する看護小規模多機能型居宅介護施設があり、グループホームである当事業所は建物の2階にある。事業所には2つのユニットがあり、「ゆっくり一緒に楽しみながら」の理念に従って、食事の提供の仕方や、外出支援の方法など、利用者の状況に合わせて、ユニットそれぞれ個性を持った支援をしている。介護計画の中に体調管理を組み込んで支援することで、利用者の状態を維持できていると管理者は捉えている。比較的介護度の低い利用者が多いこともあり、多くの利用者がグループホームを我が家だと思って、自ら進んで換気や掃除、食事の準備、洗濯物の片付けなどに関わっている。好きな時に好きなことをしながら、元気に日々の生活を送ることができていて活気がある。事業所では季節ごとの行事を積極的に行っており、それに合わせてテイクアウトを利用したり、行事食やおやつ作りなどを利用者や職員と一緒に楽しんでいる。敷地内に隣接して、同法人が経営するクリニックがあり、ここをかかりつけ医としている利用者や半数ほどいる。同じく併設の看護小規模多機能型居宅介護施設に日勤の看護師がいるので、職員にとっても日中は医療的な相談がしやすい環境にある。敷地が広いので、コロナ禍が落ち着けば、駐車場を利用して地域住民との合同防災訓練を開催したり、交流スペースを地域のイベントに提供するなど、地域との多彩な交流活動を実施することが期待できる。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	
----------	--

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人アスク
所在地	栃木県那須塩原市松浦町118-189
訪問調査日	令和4年3月9日

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない(コロナ禍のため)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない(コロナ禍のため) 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が(散歩など) 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
			実践状況			
I. 理念に基づく運営						
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている		「ゆっくり、一緒に、楽しみながら」個々に合わせた対応を心がけている	法人が掲げる理念を、申し送りノートの1枚目に大きく書き込んで、職員全員で常に意味を共有している他、事業所として「その人らしさを大切にすること」を心掛けている。支援方法について職員同士で話し合いをする際には、理念の言葉を声に出して再確認しながら、理念に沿った支援方法を考えている。他の利用者と同じことをやりたくない利用者には強制せず、その人らしさを尊重して、好きなことをできるよう職員が配慮している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している		現在コロナ禍の状況もあり、交流も限られているため現在の状況下で対応しているが、地域からの「お米の購入」「とちの葉クリニック」の検査技師によるギター演奏会との交流はしている。	コロナ禍ではあるが、感染予防を考慮しながら、近隣とのつながりを維持する努力を続けている。隣接するクリニックが主催して1階の広い交流スペースで年に2、3回演奏会を開催してくれており、デイサービスの利用者と共に招かれて、当事業所の利用者も参加している。また、隣人の農家から毎月お米を購入している。近隣の幼稚園との交流など色々な計画があるが、事業所を開所してすぐにコロナ禍になったため、実現できないままである。収束したあかつきには、地域に開かれた場として1階にある広い交流スペースを地域のイベント等に提供したいと、管理者は考えている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている		新型コロナウイルスの為、活かされていない。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている		コロナ禍のため運営推進会議は書面開催している。会議の内容については職員間で開示している。	管理者は、運営推進会議の意義を、「利用者、地域包括職員、地域住民の代表者にサービスの内容を開示して意見を求め、サービスの質を確保できる大切な会議」だと捉えている。コロナ禍で書面開催となっているため、参加者からなかなか直接意見を聞くことができないが、運営推進会議のメンバーである地域住民には資料を直接届けて、コミュニケーションをとるようにしている。議事録は事業所の入口に置いて、来所する家族に自由に見てもらえるようにしている。	隣接の看護小規模多機能型居宅介護施設と共同開催している運営推進会議に、現在グループホームの利用者家族の参加がない。今後はグループホームの利用者家族にも参加を依頼して、事業所の運営内容について理解を深めてもらうとともに、寄せられた意見をサービスの質の向上に活かしていくことが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	実践状況	通常は開所1年で実施される市の実地指導が、2年目の今年やっとな実施された。介護計画書の個別ケアの記載内容がどの利用者も同じになっていたことについて指摘を受け、利用者それぞれのリズムに合わせた個別支援に沿った記載の仕方に改善した。地域包括支援センターの担当者からは、運営推進会議の資料に対して毎回ファックスで意見をもらっている	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束の研修を通して、職員が徹底して身体拘束をしないケアに取り組んでいる。研修・指針に取り組んでいる。また、事例研修にも取り組んでいる。	運営推進会議の際に身体拘束適正化委員会を開催し、毎回テーマを掲げて事例検討している。また、年に2回事業所内で研修を開催し、指針をもとに職員全員で理解を深めて、身体拘束をしない支援に取り組んでいる。具体的には、利用者一人ひとりの行動・思いを職員全員が理解し、また職員間で情報を共有・把握して、事故が起きないように見守るようにしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	研修の実施・職員の対応や職員間での相談できる関係性を大切に業務にあたっている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	成年後見人については、把握している職員が少ないと思われる。職員間の理解と周知徹底を図る為に、1月研修を行い学んでいく。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時において、利用者と家族に納得するまで説明をし、また契約については介護報酬改定の際に説明書を出している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議は、新型コロナウイルスの為に、紙面開催になっているが意見要望を頂き回答を行っている。	毎月家族に送付している「送付状」を、事業所での生活の様子が分かるように利用者それぞれの写真を添付するなどして工夫しており、家族から楽しみにしているとの声がある。コロナ禍で、家族から面会の希望があったため、駐車場にいる家族と、2階の窓辺に立つ利用者で会話ができるように、職員が両者に付き添って話を仲介して面会の支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の「定例会議」や研修、日常業務における朝の申し送りにおいて意見を聞き、運営に反映させている。	入居して間もない利用者に帰宅願望があったため、申し送りの中で話し合いをし、職員の意見から、利用者が混乱しないよう職員全員が統一した言葉で対応するようにした事例がある。毎月の定例会、不定期開催のカンファレンス、申し送り等で、職員が自分の意見を述べやすいよう、管理者は笑顔でリラックスした場づくりを心掛けている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	日常業務において職員職員一人ひとりが、やりがいや向上心を持って働く事が出来るようコミュニケーションを密に心がけ風通しの良い職場を目指している。			
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	職員間の知識だけでなく、毎月行う研修や業務により職員一人ひとりの意識向上に務めている。			
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	月一回の湘風会ケアマネ・管理者会議を実施し各事業所と連携を図っている。			
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居相談・実調・アセスメントの際に本人、家族の不安や考えを理解して誠意を持って取り組んでいる。			
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	連絡を密に取りながら、寄り添い傾聴し、不安を解消して頂けるよう心がけている。			
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアプランをもとにアセスメントを行い、出来る事の継続とこちら側の援助、何をしたら良いのか生活暦を元に本人の出来る事を見だし居心地の良い場所、関係性を築いている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人の立場に立って、寄り添い尊重する姿勢で職員間で常に心がけている。			
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	新型コロナウイルス感染のため、面会が制限されているため、本人の様子などの近況報告をしている。			
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ハガキや、電話など本人の要望に沿って常に支援している。	コロナ禍で、なじみの人に会ったり、なじみの場所に行くことがなかなかできないため、家族が届けてくれる写真や手紙などを一緒に見ながら、利用者が大切にしてきた人たちの話を話題にして、これまで培ってきたつながりが途切れないよう職員は支援している。また、職員が手伝って手紙の返事を書いたり、電話を取り継いだりもしている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人ひとりが孤立する事無く、利用者同士が良い関係性を築く事が出来るよう職員が間に入ってかかわるように心がけている。			
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退居後も家族との関係性を大切に、相談事があった場合は親身になって対応している。			
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	一人ひとりがの思いは違う事から、その人本人の気持ちに寄り添い職員同士が連携し、何を望んでいるかを考えベストなケアが出来るようアセスメントしている。	職員は、レクリエーションや入浴時などの日々の関わりの中で、利用者の思いや意向を把握するように努めている。生活歴から若い頃、趣味でやっていたという編み物や刺し子をする機会を提供したところ、生き生きと作業を始めた利用者がある。また、利用者の思いを汲んで、新型コロナウイルスの感染拡大状況をみながら、家族の同意が得られた利用者に限って、今年の正月は自宅に戻って家族と過ごす機会を作ったところ、記憶に残らないかもしれないとの家族の予想に反して、とてもよく覚えていて思い出を繰り返し話している利用者がある。		

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居相談や実調時に生活歴を聞き、個別ケアが出来るように支援している。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	入居前に生活歴や、今の思いを聞いているが入居後に変わることもあり、職員間で情報の共有をし支援している。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	介護計画書作成時、本人や家族の意向を汲み取りプランを組み立て、職員間で連携をしモニタリングに反映させている。	片方のユニットは、管理者が毎月末に利用者から直接モニタリングし、アセスメントをしている。担当制になっているもう一方のユニットでは、計画作成担当者が毎月利用者の日々の状態について担当者から聞き取りをしてモニタリングし、アセスメントをしている。利用者の状態が変わった時など、必要に応じて計画を見直している。家族とは電話でやり取りして、計画に意見を盛り込んでいる。介護計画の中に体調管理を組み込んで支援することで、利用者の状態を維持できていると管理者は捉えている。また、歯科医院に通院していた利用者には、訪問歯科の利用を勧めて介護計画に組み込んだところ、利用者の身体的な負担軽減につながった事例がある。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録に対し、行動や言動だけではなく職員一人ひとりの気づきを記録し、職員間の連携を密にして手厚いケアになるように実践していく。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	本人の状況の変化でなく、家族の状況についても気を配りつつサービス提供や支援に努めている。入院などの変化によって状況が変化するため、その都度対応している。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域資源を把握し活用しながら満足して頂けるサービス提供に努めている。また、隣接の「とちの葉クリニック」によるギター演奏会の開催や「男性介護士の教室」に参加している。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	病院受診は家族対応・職員対応で行われ情報収集し支援している。		入居前からのかかりつけ医を受診をしている利用者は、コロナ禍の現在、体調に特に変化がない場合は、バイタル表や利用者の様子をメモで渡し、家族が受診して薬をもらってきている。併設されているクリニックがかかりつけ医の利用者は、担当職員が付き添って受診し、受診結果は家族に電話や月に1度送っている書類送付状に書き添えて伝えている。受診情報は家族付き添いや職員付き添い共に、申し送りノート等に記載し職員間で情報の共有をしている。利用者に変化があった場合は、家族に電話連絡し受診の同行をお願いするが、困難な場合は職員が対応している。また、家族の希望により訪問歯科を利用している利用者がある。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	ジョイフルには看護師が在職していないため「きぬの流れ」の看護師に相談やアドバイスを頂いたり、内服薬に疑問がある時は調剤薬局に聞いて対応している。			
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	家族やソーシャルワーカーと連携を取り情報提供をし、退院後のアセスメントを行い支援している。			
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時の契約時に年齢や現病状を把握し、終末期についての思いを聞いているが、長い間の入居で意見が変わることもあり、身体状況の変化時に再度確認をしている。	看取りについては、体制ができていないこともあり、医療行為や延命治療が必要になった場合は事業所では対応できないことを、入居時に家族や利用者者に伝えている。開設して丸2年経過し、管理者以下職員の日頃の支援により、利用者にとって事業所が我が家のように居心地のよい場所になってきている。今後利用者の中に住み慣れた事業所で看取りを希望する人が出てくることも想定され、事業所として職員への研修や看取りの体制作りが必要だと管理者は感じている。	今後、利用者が重度化した際や終末期に具体的に事業所としてどのような対応ができるか検討し、計画的に勉強会や研修等を実施して、職員全員の認識や意欲を高めることが期待される。同時に、事業所としてチームで支援に取り組む体制づくりを目指して、住み慣れた利用者が希望すれば事業所で終末期を迎えることができるように努めてほしい。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年の研修において職員間で共通意識を構築し実際にシミュレーションを行っている。すべての職員が同じ事をしていく理解。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の日中・夜間の避難訓練を実施している。 災害のときの備品も揃えている。	事業所は併設された看護小規模多機能型居宅介護施設と合同で昼夜想定避難訓練を行っている。事業所は2階にあるが、避難誘導訓練ではほとんどの利用者がスムーズに避難することができた。車いす使用の利用者はシーツを使って避難させることを確認したり、混乱して想定外の行動をした利用者がいたため、今後はその利用者を最優先で誘導することを職員間で確認した。避難訓練を通じて一人ひとりの避難方法を職員全員で共有し再度検討している。コロナ禍のこともあり、地域の人に訓練への参加依頼はしていない。災害時に備えて食料、水、ランタン、カセットコンロなど備蓄しており、管理者が管理している。	災害は昼夜を問わず発生することが想定され、特に夜間の場合、職員だけの避難誘導には限界がある。地域住民の協力が大きな助けになることから、運営推進会議のメンバーである自治会長等を通じて地域住民にも理解と協力を求め、コロナ禍が落ち着いたら、地域住民と合同で避難訓練を実施することが望まれる。	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援						
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの性格を考慮し、意思に寄り添い対応している。	職員は利用者や家族の意向を聞きながら名字や名前に「さん」付けて呼んでいる。職員は利用者が大切にしている人や物、大切にしている考え方や思いを気付いたり感じたりした時に個人ファイルに記載して職員同士で共有し、利用者一人ひとりの気持ちに寄り添うように努めている。管理者は利用者が日々の生活の中で安心した気持ちで過ごせるように、職員の声の大きさや言葉かけに心配りをしている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	生活暦や若い時の趣味を考慮し勧めるために、本人が言い出せる環境作りに務める。			
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	できるだけ本人に寄り添った支援、声掛けをしている。			
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	定期的に、爪のネイルセラピーを行っており、色を選ぶ事の大切さを支援している また、訪問カットも利用して綺麗になった喜びを感じて頂いている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	食事作り・食器洗いが好きな利用者と一緒に 行う事で、心に張りが出て、またコミュニケーションも取れている。	これまで3食手作りを基本としていたが、片方のユニットは人員体制が整わなくなったため、現在一時的に外注に切り替えている。外注しているユニットでは、おやつや行事食を利用者と一緒に手作りしたりテイクアウトを利用したりして柔軟に対応している。両ユニット共に利用者は食事作りに積極的に参加し、盛り付けや片付け等を行っていて、本人の力を発揮できる場面となっている。節分には恵方巻、桃の節句にはちらし寿司、納涼祭では焼きそばやたこ焼きをバイキング形式で提供したりして、利用者が職員と一緒に食を通して季節を感じ、雰囲気を楽しんでいる様子が窺える。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	野菜を多く使うように献立を考え、塩分控えめに栄養が偏らないよう気をつけると共に体調管理に気をつけている。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	誤嚥性肺炎の予防には、口腔ケアをしっかりと行う事が大切と言われている為、自分で出来ない・やらない利用者には声掛けをし、見守り・一部介助で支援している。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者のADLに合わせ、排泄のパターンを把握し支援している。	利用者は布パンツまたは、リハビリパンツにパッドで過ごしている。トイレはスペースが広く、車いす使用の利用者でも手すりなどにつかまって自力で便座に移動できる作りになっていることもあり、利用者全員が一人でトイレに行くことができる。職員は排泄チェック表を見ながらトイレに誘導することもあるが、できるだけ本人に任せて、できない所や失敗した時は羞恥心や自尊心を傷つけないように支援している。夜間、ふらつきのある利用者には転倒防止のため、居室でポータブルトイレを使用してもらっている。職員は利用者一人ひとりの排泄方法を理解し、自立を妨げることのない排泄支援に努めている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	野菜を多く取り入れ、体操や散歩などをし腸の活動を活発にし、また水分不足にならないよう水分チェックの支援をしている。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の時間が楽しくなるよう、着替えを一緒に用意したり、入浴剤を利用したりする事で入浴する喜びを感じられるように取り組んでいる。		浴室は利用者の動線に沿って手すりが設置され、回転するシャワー椅子を使用するなど利用者の安全に配慮がされている。脱衣場には利用者がゆったりと着替えができるソファが置かれている。週3回、午前中の好きな時間に体調を見ながら入浴している。職員はできるだけ利用者の意向に添いたいと考えている。入浴は通常1人介助で行い、利用者のペースに合わせた支援を心掛けている。入浴を嫌がる利用者には、理由を聞き時間をずらして入浴を促したり清拭を行っている。入浴時には利用者の体に傷がないか肌の様子を観察し、異常があれば申し送りノートに記載し職員間で共有している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	利用者が自由に休息したり、安眠出来る環境が整うように空調管理している。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情に関しては、個人ファイルで管理されており、新しく処方されたり変更・副作用などがあつた場合は職員の申し送りノートで周知徹底をしている。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	コロナや業務優先な所があり、利用者様を楽しませられていない。個々の役割や楽しみごとに力を入れ、寄り添った支援をしていきたい。			
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	新型コロナウイルス感染防止の観点から、外出は実施していない状況にあるが天気の良い日は敷地内の散歩をしている。また、定期的に隣接されている「とちの葉クリニック」でのギター演奏会に参加や「男性介護士の教室」の説明会に出席。	天気が良く風のない穏やかな日には、時間を選ばず散歩に出かけている。敷地内の散歩の他、近くのぶどう畑や保育園まで足を伸ばすこともある。コロナ禍ではあるが、混まないような所を選んで、白鳥見学やイチョウの紅葉、コスモスなど季節の移ろいを感じられる場所にドライブに出かけて、記念撮影だけをしている。職員が外出の声掛けをすると、利用者は玄関のソファに座り、利用者同士で楽しそうに話をしながら出発を待っている。		
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ドライブに以前外出した際、途中にあつた自動販売機で、利用者にお金を渡し好きな飲み物を購入した際、長い事お金を触っていなかった為、とても感激されていた。			

自己	外部	項目	自己評価	実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
			実践状況			
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者が希望する際は、職員が取り次ぎ、話ができるよう支援をしている。			
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節感を大切にするため、利用者と一緒にホール内の飾り付けや、月毎のカレンダー作成等で心地よい生活を過ごして頂くよう心がけている。	2階にある事業所は明るく開放感があり、すっきりと片付けられている。対面式キッチンには、職員と利用者が一緒に作業しやすい広い調理スペースがある。居間には職員が事務作業をするスペースがあり、仕事をしながら利用者の様子がよく見渡せる造りになっている。利用者は居間にいることが多く、コロナ感染予防のためテーブルの配置を工夫したり、利用者の体格に合わせて足台を使用して居心地良く過ごせる環境作りに努めている。壁には利用者と職員が一緒に作ったはり絵の大きなカレンダーや塗り絵、書道作品等が飾られている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファやテーブルの配置を変えたり、居心地の良い空間作りに気を配っている。			
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	入居前に「荷物のリスト」を家族に渡し、使い慣れた物を用意して頂いている。	居室には腰高の窓があり、カーテン、クローゼット、エアコン、電動の低床ベッド、車椅子でも使用可能な洗面台、ナースコール等、利用者の安全に配慮した設備があらかじめ備え付けられている。テレビや収納ケースなど利用者が使い慣れたものや好みのものを持ち込み、落ち着いて過ごせる部屋になるように本人の意向を確認しながら配置をしている。部屋の掃除は朝食後職員と一緒にしている。また、週1度シーツ交換をして衛生面にも配慮している。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	利用者一人ひとりのADLを考慮した上で、安心安全に自立した生活をして頂けるように環境作りに務めている。			